

ためのものである。すなわち、この種の証拠は偽りにつながっていくものであり、それをパウロは一一・一三―一五で述べている。幻とか啓示とかいうものは、他人によっては証明できないし、他の人々が見開きして、観察できる範囲の外に存ると言える。これらは使徒職の条件となるようなものではない。このようにして、パウロは反対者やコリント信者の幻や啓示を使徒職の証拠とする愚かさを見せつけたのである。

四、幻を見る者としてのパウロ

パウロのバラダイスの経験は実際にあつたのだろうか、それとも頭の中で作り出されたものであろうか。パウロは恍惚の経験に精通していたようであるから、反対者の主張を破壊するために、この幻と啓示の経験を捏造したのだろうか。彼の生涯のどの時点でこの事件が起きたのかははっきりしないから、実際の経験であつたというのは疑わしいという学者もいる。④ それに加えて、二―四節は風刺的な要素も多いので、実際の宗教経験からの証しと言えないのではないか、という疑問も出てくる。しかし二二・一―一〇をよく読むと、かなり個人的な経験を感じさせる。パウロの使徒職についての批判は、彼の個人的問題と関連している。六節では、必要ならもっと多く語ることが出来るが、「それは控えましょう」と言うのであるから、パウロ自身の経験にちがいない。七節では、肉体のとげは、その啓示があまりにすばらしかったから、と言っている。二節で「一四年」というのも、実際の年月ではないか、と受けとれる。⑤ このように、幻と啓示の経験は架空のものではなく、実際に起つたとする方が、事実に近いのではないだろうか。

さらにパウロは誰よりも多くの異言を語ると言っている（第一コリント一四・一八）くらいだから、恍惚経験に縁のない人ではない。多くの異言の経験の中にはある種の恍惚経験も含まれているかもしれない。⑥ 第一コリント一四・二二―二四―一八節では、理性は異言に関係するところが無いし、益するところが無いと言われている。もし、*ἐξου-*

νη ということが、*ἐκστασις* を指すならば、第二コリント五・一三は恍惚の経験を指すのかもしれない。第二コリント一二の一でも幻と啓示の両方とも複数形が用いられている。使徒の働きは、ダマスコで（九・一七）、コリントで（一八・九）、エルサレムで（二三・一一）、パウロの恍惚の経験を記録している。それゆえ、パウロがしばしば恍惚の経験をしたことは十分に考えられる。そのパウロがどうして一四年も前の経験を一―六節で例にとりあげなければならなかったのか。ひとつの理由は、七節にあるように、これがありふれた経験ではなかったことだろうが、それよりも、彼は自分の計算にあつた経験を数多くの経験の中から選んだのではないだろうか。反対者の誇りをへこますために、幻と啓示に関係があり、ソクラテスの伝統を用いて、ひとひねり出来ることのできる性格の経験を選んだ、と考えられる。

実際にあつた経験をとりあげたが、パウロはそれを彼の目的のためにひねりを加えた。それゆえ、その記述は実際の経験なのか、風刺なのか区別するのがむずかしくなった。リンカーンは「パウロの記述は真正の経験の上に立っているものの、コリント信者がそれによって判断しないように皮肉なひねりが加えてある」と観察している。⑦

第三章 弱さと誇り

一、橋渡しの節（五―七 a 節）

五―七 a 節は、二―四節と七 b―九 a 節を結ぶ橋である。パウロの壮大な幻と啓示の証しには、肉体のとげによる屈辱がつづく。五―七 a は新しい話題への変り目である。五節には次のような平行が見られる。

ἵππε τοῦ τολούτου

καυχύομαι

ὑπερ ἡ εὐαγγελίου ὁ γὰρ χαυνύσονται, εἰ μὴ ἐν τοῖς ἀσθενείαις.

五b節では、パウロは誇ることのできる人と自分を区別し、「そのかわりに「自分の弱き以外には」という句で、彼の誇りの原則を示す。

六節では、パウロはもし語る必要があれば、今度は愚かな者としてではなく、真実なことを話そうと考えるが、自分自身が過大に評価されることを好まない。パウロは、もし、自分自身を高く評価されるならば、人々が注目すべきなのは彼の福音であって、彼自身ではない、ということが曖昧になるおそれがあるので、「屈辱と苦難を耐えしのぶなら、十字架につけられたキリストのもっと有効な証人となることが出来る」と考えた。^⑤

ここでパウロは幻と啓示の経験が使徒職の基準とならないことを宣言している。パラダイスの経験は彼自身のみが神と関係しているにすぎず、教会のために有用とは言えない。それゆえ、それらについてはもはや語るうとはしない。

六節では、パウロは自分自身の正しい理解を望んでいるように見えるが、彼の意図はもっと深い。彼の使徒職の基準は、恍惚の経験が使徒のしるしと考える人々たちであったものであることを示そうとしている。パラダイスの経験をさらに深く述べることによって、「あの大使徒」を一掃することは容易であるが、それを止めて別の道を、すなわち、屈辱と弱さは、恵みと共にクリスチャンの存在にとって必要だ、ということを示そうとしている。パウロにとって使徒職の有効な、目に見えるしるしは、神の力があらわされる弱さである。この主張を示すためにパウロは七b~一〇節に論をすすめる。

1 七a節の問題

この本文とパニクチュエーションの問題は長らく論議されているが、まだ確実な説に達していない。プランマー

は、もともと書きとるときに説が入りこんだ、という説をとる。^⑥ ある学者は、七節の意味は確実で、簡単で「パウロに与えられた、すばらしい啓示は彼を高ぶらせるかもしれない。これを防ぐために激しい屈辱的な肉体の苦痛が彼の上におかれた」という内容とする。こう考えると、七a節と七b節は連結されて^⑦

“... ὑπερὸ βλάβης με ἢ ἀχνοῖα τι εἶμιον ἢ τὴ καὶ τῆ ὑπερβολῆ τῶν σποχάλυψεων (δο) ἵνα μὴ μετρίαιποιμα...”

多くの学者や訳がこの解釈にしたがっている。^⑧ この解釈は本文の一貫した意味からは良いが本文批評からの強い支持はえられない。この解釈の大きな理由は本文が腐敗していると信じているところから生れている。

もし、ネストレ本文に従うなら、上記のような読み方はとれない。評論は省くが、次のようになる。^⑨

“... ὑπερ ὅ βλάβης με ἢ ἀχνοῖα τι εἶμιον καὶ τῆ ὑπερβολῆ τῶν σποχάλυψεων. δὸν ἵνα μὴ ὑπερβαίω-

μαι, ἐξόβη μοι κτλ.

七a節は前の六節と連結され、七b節からは切り離される。^⑩

(2) 七a節の *καὶ* は *exegeticum* であって、その意味は「すなわち」である。^⑪

(3) *δο* のある方が本来の本文の読みであろう。*δο* の働きによって、七a節と七b節は意味の上から関係づけられる。^⑫

七a節と七b節を直接結びつけて解釈するのは魅力的であるが、本文の方から言うと、このように七a節と六節が結びつく方が支持され、何人かの学者によってこの読み方が支持されている。^⑬

二、肉体のとげ (七b~八節)

パラダイスの経験につづいて、パウロは反対者の関心の第二の点、いやしの経験を語りはじめる。パウロの回復のキリストの臨在と力があらわれる、と主張する。^⑤ 正式の使徒になる条件は、*θεῖος ἀνθρώπος* として神癒であり、ここには

七節の「肉体のとげ」はパラダイスのすばらしい啓示と釣合をとるために与えられた。パウロはその理由を「私が高ぶることのないように」とくりかえし述べている。^⑥ その肉体のとげは三度の祈りにもかかわらず、いやされず継続するが、それが正確に何であるかはわからない。いくつかの解釈の可能性を示すと、(1)ある種の身体の病氣。多くの人がこの説をとるが、^⑦ どんな病氣かという問題になると意見が一致しない。(2)パウロは敵から「サタンの使い」というニックネームをつけられていたので、それが重荷となって「肉体のとげ」と呼んだ。^⑧ (3)ある人々は、八節の *ὄψιν τοῦ* *ἄνδρα* を男性名詞と受けとり、*σκύλαχος* をパウロの敵である人物を意味すると理解する。^⑨

しかし、幻と啓示と関連した弱さの問題をここで扱っているのであるから、*σκύλαχος* がある種の肉体の病患を含んでいるとしても不思議はない。もし(2)と(3)なら、パウロはここで肉体のいやしに関心がなくなることになり、彼が論じている内容と関係がなくなってしまう。

次の図は七b節の分解である。



C σκύλαχος τῆ σαρκί

A ἰσχάριον

対応関係から言うと *σκύλαχος* は *ἄγγελος Σατανᾶ* と同一のもので考えてよい。なぜパウロはこの二つのものが同一のもので言うのであるのか。(1)パウロの肉体のとげはコリント信者には知られており、使徒である者にとってマイナスの証拠と考えられていた。すなわち、パウロがサタンの支配下に置かれていて証拠である。^⑩ (2)パウロ自身が肉体のとげをサタンの使いのせいにながら、神はそれさえも大きな摂理によって有益なものに変えて下さることを示したくねがった。^⑪

三、力は弱さを通して (九a節)

三度の祈りの結果、九a節に示すような主から啓示があった。これが一二・一〇の頂点とも言うべきものである。ベッツは七b~一〇節をクリスチャンの *arealogy* とみて、とくに九a節を「いやしの宣言」と考える。^⑫ しかし、彼自身が示すように九a節と同時代の *arealogy* (神々や英雄の武勇伝) とは次の点が異なる。(1)いやしは拒否されてしまった。^⑬ (2)宣言は普通は命令形でなされるのに、ここでは、叙述形でなされる。^⑭ (3)いやしの後のささげものが欠けている。このような内容においては異なるが、形においては、七b~一〇節と一般の *arealogy* の間には、よく似た要素は否定したい。^⑮ 形ばかりでなく、論題の弱さについても他の文書の中に同じような思想を見つけることができる。たとえば、フィロンの *De vita Mosis* 1: 69・プリニーの手紙七・二六・一など。弱さと力のパラドックスに言及したのは、パウロが唯一の人物ではない。どこがパウロの独特の思想なのだろうか。

九a節には次のような対応関係が見られる。

I
 a) ἀπει
 b) σοι
 c) ἡ χάρις σου

II
 c) ἡ γὰρ διακονία
 b) ἐν ἀσθενείᾳ
 a) τελέτῃ

このὁ χάριςはパウロを使徒としての奉仕に召し出した特別な恵みを指す、と考えられる。神のἐπίκλησисが第一コリント一五・一〇にあるように、パウロを使徒にしたのである。この恵みは静的なものではなく、現在の事情の中で新しく把握されねばならない。弱さの中では、この恵みは力として経験される。それゆえ、パウロの反対者やコリント信者が強調している霊の賜物がなくても、神の恵みは彼を使徒とすることができる。

恵みは9節にある神の恵みであり、神的な力であり、一方、弱さは人間の弱さである。パウロの反対者は、弱さは御霊の欠除を示し、神の力は力として現われる、と主張し、彼を弱い、サタンにつかれていて、と軽蔑する。しかし、パウロは弱さを神の力と結びつけ、弱さは神の力の現われを妨げないどころか、弱さこそ神の力の現われの場所であり、条件なのである。第二コリント四・一〇〜一一で、死はイエスの生命が現われる条件であるように、弱さは神の力を実現させる条件なのである。パウロは第一コリント二・三〜五でも、福音は彼の弱さを通して力強く働いたと言い、同書の一・二七によれば、福音は弱い者のためである。

この弱さと力、死と生命のパラドックスはキリストの死と復活につながる(一三・一四)。キリストの死は弱さに関連しているし、復活は力に關係している。パウロの反対者やコリント信者は恍惚の経験や奇蹟や不思議な力は、復活して高擧されたキリストに関連している。反対者が恍惚の経験で完全に現われる力を称賛するとき、パウロは弱さを

とところに完全に現われる力を賛美する。彼らが御霊は弱さを取り除く、と主張するとき、パウロは御霊は弱さを通して、力をもって強く働く、と主張する。パウロは「信者の宗教体験は彼を弱さからひきはなし、恍惚と靈感の影に隠してしまうのではなく、キリストが弱さのうちに現臨することである。弱さは、キリストを経験する一部なのである」^②。だから御霊による力は人間的な弱さを究極まで消滅させるというのではなく、むしろ人間的な弱さの受容にある。反対者もコリント信者も復活のキリスト、御霊の経験、カリスマ的な力を経験したが、十字架上のイエスの苦難の経験、弱さの経験を無視した。パウロは、この傾向は死と生命、死と復活のパラドックスを無視しているので危険だと考える。時が到来しないかぎりには、信者といえども死と生命のパラドックスの間で生きることが要求される。なほほど将来においては、死なくして永遠の生命を楽しむ時がやってくるであろう。だが現在はそのパラドックスの暗い面を見おとすことは信仰生活の破滅につながる。

力(dynamis)は生来人間が所有しているものではなく、逆境の中で経験する、超越的な神の力なのである。もし反対者やコリント信者がこの事実を理解していれば、徒らにカリスマ的な力を自分のものと勘ちがいて誇ることでもなかったであろう。だが教会の現実には、コリント信者は豊かな町を背景にしてカリスマ的賜物と富を誇り、パウロの反対者は力のキリスト論というべきὁ δόξα ἀληθῆςを振りまわす。第一コリントでは、ある信者たちは、もはや死ぬことはない、復活はすでにおこった、と信じていたようであるが、パウロは一五章で死の現実性を強調した。同じ楽天的傾向は第二コリントにもつづき、弱さの経験、十字架上のイエスを弱さとして退け、カリスマ的力の経験、高擧されたキリストの経験を強調した。これが第一、第二コリントの傾向で、コリント信者は力の愛好家である。これに對してパウロは十字架上のイエス、弱さ、苦難に絶えず言及する。そしてこれらのパラドックスの暗い面を誇りとし、反対者やコリント信者と鋭いコントラストをつくり出した。

このパウロの取扱いは、キリストの苦難にあずかるというモチーフにつづく。すなわち、信者は自分自身の苦難のうち、幾分かでもキリストの苦難に参与する。この思想はパウロの手紙を一貫して流れている。パウロによれば、信者が将来の復活にあずかるまでは、キリストと共に死ななければならぬ(ガラテヤ二・一九~二〇、ロマ六・五)と考える。また、パウロは自分の苦難はキリストの苦難にあずかることと見なす(第二コリント一・五)。キリストの復活の力は苦難にあずかることを通して現われる(ピリピ三・一〇~一一)。彼の手紙を特色づけている苦難—弱さ—キリストの死のモチーフは、次のようにも言える。キリストの復活がその苦難と死を土台にしているように、力は弱さがあるときに現われる。信者が十字架の上のイエスを経験するときに、高擧されたキリストを経験する。反対者とコリント信者の誤りは、この順序を逆にしてしまうか、いや、パラドックスの片面をまったく無視してしまうことである。そこでパウロは彼らの福音は「異なった、誤った福音」と批評したのである。誤った福音を説く者たちが使徒であるわけではない。

第二コリントのどこどこに(四・八~一二、六・四~一〇、一一・二三~二四、一二・一〇)、パウロは苦難のカタログともいべき災難のリストを掲げ、それが彼の使徒としての存在を特色づけている。その中でも一二・一〇以外は、奉仕 (*Diakonia* あるいは *Diakonia*) の概念と関係づけられている。弱さは使徒の奉仕の特別なしるしである。そして、その背後には十字架につけられたイエスを弱さとして理解する思想がある。十字架と復活は弱さと力のあらわれである。十字架という究極的な弱さと考えられるものを通して、神の力は流れ出る。それゆえ、使徒の奉仕もキリストの十字架と復活、死と生命、弱さと力にあずかることが含まれる。使徒という者はこの世の生を離れ、何か高いレベルの存在に達するというのではない。かえって天国に属する者として、現在はこの世で自分の十字架を背負う者である。これに反し、反対者とコリント信者は使徒はイエスの死と苦難にあずかることはない、と言う。

彼らは高擧されたキリストの使徒ではあるかもしれないが、十字架につけられたイエスの使徒とは言えない(一三・七)につけられたイエスの弱さを経験したパウロこそ、キリストの真の使徒である。

パウロのいやしの証しをふりかえってみると、いやしの証しはいやされない証しになり、いやしのかわりに主の宣言が現われた。反対者の期待は九a節で肩すかしをくわされた形で、「神の恵みはパウロが使徒であるために十分である」ということばで終止符を打った。この宣言によってパウロの肉体の弱さは彼の弱さに終ってしまうのではなく、十字架につけられた主イエスの恵みの流れ出る通路と認められた。神の力はカリスティックな現象によって現わされるのではなくて、パウロの中の地上の人間の弱さを通して現われる。それゆえ、再び、誇る者は自分を誇らず、主を誇れということになる。

四、個人的な結び(九b~一〇節)

パウロは九a節を自分の個人的な生活に適用し、一〇b節では次のように書きなおされている。"ὄρα γὰρ ἡδὲ ἐν, τὴν οὐρανὸν ἔχου..." 九a節で *καθ' ἑαυτὴν* は九b~一〇節では *καθ' ἑαυτὴν* (複数形) に変えられている。パウロは弱さを誇るというが、現在の信仰生活の中で弱さとは何だろう。K・バルトは、信者の存在の中で、自分が正當的に、真正に誇りうるものを取り去った後に残るもの、すなわちキリストのため屈辱、迫害、困難などがそれである、と注釈している。キリストのために苦難に会うことは彼がキリストに属している者であることを意味している。そして、そのことこそ反対者がパウロについて疑っていることなのである。彼が弱さを誇ることは、そのまま、主を誇ることに相当する。このような人こそ、主が推薦する真正の使徒である。使徒である証拠にパウロは、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじている(一〇節)。神の力はそのような弱さを通して現わされる。だからこそパウロは弱

さを誇る、すなわち主を誇る。

結 論

パウロの弱さと力についての理解は明白である、すなわち、来るべき時代がまだ到来していないのであるから、信者の地上の存在は、弱さと力、死と生命、屈辱と栄光というパラドックスの両面を経験することは避けられない。この一方を無視して、とくに暗さの面を無視して歩むことは、現実を無視しているのであり、十字架と復活の二面をもつキリストの福音を正しく把握していないのである。これがパウロから知られることであるが、彼は創世記一―二章にあらわされた人間存在の特質をよく理解しているように見える。創世記一章によれば、人間は神のかたちにつくられ、他の被造物の王とも言える輝かしい、力ある存在である。これが人間存在の基本的な一面である。ところが二章に入ると、人間は土地のちりから造られたと記されていて、ここに人間存在の別の面、脆さと弱さの側面が関係している。人間はこの二つの側面をもっているのであるから、どちらを無視しても、ゆがんだ人間理解となる。それゆえ、どのような人間も弱さと力のパラドックスを免れることはできない。第二コリント一―二章一〇節のパウロの弱さと力の議論はこの点を正しくとらえているのであって、もっと高く評価されるべきものである。

神の力は必ずしも人間の弱さを除くことはせず、弱さと力という二つの相反する概念が共存するときがある、という思想は、現実の人間存在に大きな慰めを与える。神から離れている弱い存在は信仰において克服されるが、それにもかかわらず、自然のままの弱い存在は終わっていないのであり、苦しみは苦しみとして、弱さは弱さとして経験されているのが私達の現実である。信者が奇蹟的いやしをなし得るときはこの贈物を求めることができるが、もし、弱さの意味があり、広い適用が可能である。^⑧

注

※次の略号が用いられる。

JBL: Journal of Biblical Literature.

Nov Test: Novum Testamentum.

NTS: New Testament Studies.

TDNT: Theological Dictionary of the New Testament.

ZNW: Zeitschrift für die neutestamentliche Wissenschaft.

ZTK: Zeitschrift für Theologie und Kirche.

聖書本文の判読が、逆説新改訳聖書を借用した。

- ① H. D. Betz, *Der Apostel Paulus und die sokratische Tradition* (Tübingen: Mohr, 1972), p. 130.
- ② E. Käsemann, "Die Legitimität des Apostels," *ZNW* 41 (1941): 56-59.
- ③ R. Bultmann, *Exegetische Probleme Des Zweiten Korintherbriefes* (Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1963), pp. 21-22.
- ④ D. Georgi, *Die Gegner des Paulus im 2 Korintherbrief* (Vluyt: Neukirchener, 1964), p. 231. n. 1: "Das Rühmen ins Masslose und eine daraus folgende Kompetenzüberschreitung haben sich wohl beide Teile vorgeworfen."

- ①② Jewett, *Anthropological Terms*, p. 278.
- ①③ Zmijewski, *Narrenrede*, p. 337.
- ①④ J. Lindblom, *Gesichte und Offenbarungen* (Lund, 1968), p. 45.
- ①⑤ Dunn, *Jesus*, p. 215.
- ①⑥ Betz, *Paulus*, p. 95. 曠ノヲ曠ヲ曠ノニシテトテ' F. F. Bruce, *Paul* (Grand Rapids: Eerdmans, 1977), p. 138.
- ①⑦ Spittler, "Ecstasy," p. 264.
- ①⑧ Lindblom, *Gesichte*, p. 44.
- ①⑨ W. Bauer, *A Greek-English Lexicon of the New Testament and Other Early Christian Literature*, trans. by W. Arndt (Univ. of Chicago, 1959), p. 109.
- ①⑩ Betz, *Paulus*, p. 89.
- ①⑪ Lindblom, *Gesichte*, pp. 43-44.
- ①⑫ Dunn, *Jesus*, p. 216.
- ①⑬ Bauer, *Greek-English Lexicon*, p. 275. ἑξέστημι means "be out of one's sane."
- ①⑭ The theory that the experience of Paradise is Paul's actual experience in his life is supported by many; e. g., Barrett, Lindblom, Spittler, Dunn etc.
- ①⑮ A. T. Lincoln, "Paul The Visionary: The Setting and Significance of the Rapture to Paradise in 2 Corinthians 12:1-10," *NZTS* 25 (1979): 209.
- ①⑯ Barrett, *2 Cor.*, p. 313.
- ①⑰ Plummer, *2 Cor.*, p. 347.
- ①⑱ Lincoln, "Paul The Visionary," p. 218.
- ①⑲ 操呂艦' TR, AV, ASV, NEB, RSV: Barrett, Plummer, Spittler, Lindblom, Hering, P. E. Hughes, *Paul's Second Epistle to Corinthians* (Grand Rapids: Eerdmans, 1962), p. 441; R. H. Strachman, *The Second Epistle of Paul to the Corinthians* (NY: Harper.), p. 29; N. G. Smith "The Thorn that stayed," *Interpretation* 13 (1959): 409.
- ①⑳ In detail, see Zmijewski, *Narrenrede*, pp. 351-57.
- ㉑ Ibid., p. 354.
- ㉒ Ibid., p. 355.
- ㉓ Ibid., p. 364.
- ㉔ Bultmann, *2 Kor.*, p. 226; Zmijewski, *Narrenrede*, pp. 354-55; W. de Boor, *Der zweite Brief des Paulus an die Korinther* (Wuppertal: Brockhaus, 1972), p. 233.
- ㉕ H. D. Betz, "Eine Christus-Aretalogie bei Paulus," *ZTK* 66 (1969): 304.
- ㉖ Greek philosophers thought that "das Selbstlob seinen Beweggrund in der 'Selbstliebe' (φιλασότης) hat und daher den Menschen zur Vergöttterung und Selbstvergöttterung verleitet; sie lässt ihn das Mass überschreiten, das ihm als Mensch gesetzt ist" (Betz, *Paulus*, p. 76).
- ㉗ Concerning thrice prayer, Zmijewski comments, "Vielmehr ergibt sich aus zahlreichen religionsgeschichtlichen Parallelen, dass das dreimalige Bitten ein geläufiger Brauch war" (*Narrenrede*, p. 380).
- ㉘ E. G. Barrett, Bultmann, Hering, Hughes, Dunn, Betz, Strachman, J. Lightfoot, *St. Paul's Epistle to the Galatians* (NY: 1891), pp. 186-91, Goodspeed Translation, J. Philip Translation; G. B. O'Collins, "Power made Perfect in Weakness 2 Cor. 12: 9-10," *CBQ* 33 (1971): 532. E. Güttgemanns, *Der leidende Apostel und sein Herr* (Göttingen: Vandenhoeck, 1966), pp. 168-69.
- ㉙ H. D. Betz, *Galatians* (Philadelphia: Fortress, 1979), "The precise nature of this illness is unknown to us. A mass of studies which has been produced on the subject remains mostly speculation" (p. 225).
- ㉚ J. Thierry, "Der Dorn in Fleische," *NovTest* 5 (1962): 303-3.
- ㉛ T. Mullins, "Paul's Thorn in the Flesh," *JBL* 76 (1957): 303.
- ㉜ Betz, *Paulus*, p. 92.
- ㉝ Zmijewski, *Narrenrede*, p. 372; M. J. Harris, "2 Corinthians," in *The Expositor's Bible Commentary* (Grand Rapids: Zondervan, 1976), 10: 396; D. A. Carson, *From Triumphalism to Maturity* (Grand Rapids: Baker, 1984), p. 147.

